

展示資料集

不木と乱歩の出会いが
日本の探偵小説とSF
のはじまりだった

特別展示 名古屋ゆかりの文学者

こさかいふぼく えどがわらんぼ
小酒井不木と江戸川乱歩

～純国産・探偵小説とSFの誕生～

期間 令和3年1月5日(火)～31日(日)

場所 鶴舞中央図書館1階玄関ホール

主催 鶴舞中央図書館

協力 蓬左文庫

小酒井不木と江戸川乱歩

展示資料集

目 次

1. 展示ちらし	1
2. 展示全体写真	3
3. 展示資料	4
4. 小酒井不木 年譜	5
5. 江戸川乱歩 年譜	6
6. 小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋文学地図	7
7. 小酒井不木・江戸川乱歩を中心とする 名古屋ゆかりの文学者相関図	8
8. 小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋ゆかり年表	9
9. 小酒井不木エピソード集	10
10. 江戸川乱歩エピソード集	17
11. S F とは	24
12. 小酒井不木を青空文庫で読む	25
13. 出典・参考資料一覧	26

不木と乱歩の出会いが
日本の探偵小説とSF
のはじまりだった

特別展示 名古屋ゆかりの文学者

こさかいふぼく えどがわらんぼ
小酒井不木と江戸川乱歩

～純国産・探偵小説とSFの誕生～

期間 令和3年1月5日(火)～31日(日)

場所 鶴舞中央図書館1階玄関ホール

主催 鶴舞中央図書館

協力 蓬左文庫

小酒井不木と江戸川乱歩

～純国産・探偵小説とSFの誕生～



資料展示

- 『生命神秘論』 小酒井不木の本名「光次」の署名がある
- 『ハイネ評伝』 不木の友人、広小路伯爵の著作
- 『闘病術』 不木の大ベストセラー、序に岡戸武平への謝辞がある
- 『不木・乱歩・私』 不木の助手を務めた岡戸武平が語る秘話
- 『鬼の言葉』 江戸川乱歩著、「平井太郎」の寄贈者票がある

パネル展示

小酒井不木・江戸川乱歩 年譜

小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋文学地図

小酒井不木・江戸川乱歩を中心とする名古屋ゆかりの文学者相関図

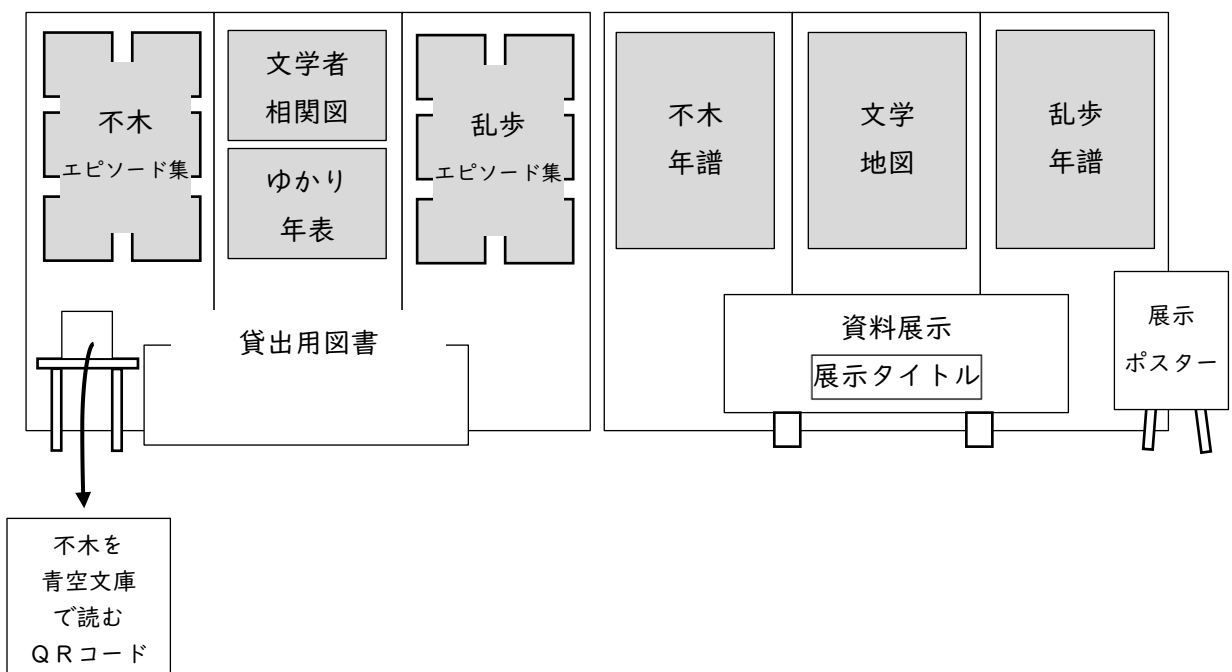
小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋ゆかり年表とエピソード集

小酒井不木を青空文庫で読む

恋愛曲線	人工心臓	名古屋スケッチ	好色破邪顕正

※これらの作品には、今日からみれば、不適切と受け取られる可能性のある表現があります。

展示全体写真



展示資料



『ハイン評伝』

藤浪水処著 洛陽堂 大正5年

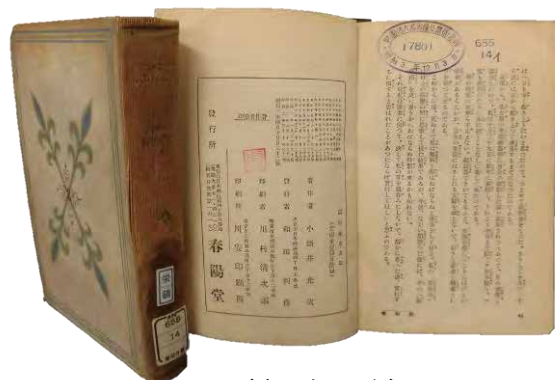
水処は広小路伯爵の異名をもつ洋装紳士。不木の紹介で、洛陽堂から出版するはこびとなった。不木の解説付き。



『生命神秘論』

小酒井光次著 洛陽堂 大正4年

小酒井不木が本名で出版した処女出版。表紙見返し（遊び）に「光次」の署名がある。



（左は初版本）

『闘病術』

小酒井不木著 春陽堂 昭和2年

初版は大正15年発行で、またたくまにベストセラーとなった。序で岡戸武平の助力に感謝の意を表している。

『不木・乱歩・私』

（名古屋豆本 第32集）

岡戸武平著 亀山巖 昭和49年

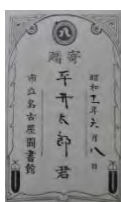
岡戸武平は不木の助手で、新聞社時代には乱歩の同僚だった。第一回直木賞候補者でもある。

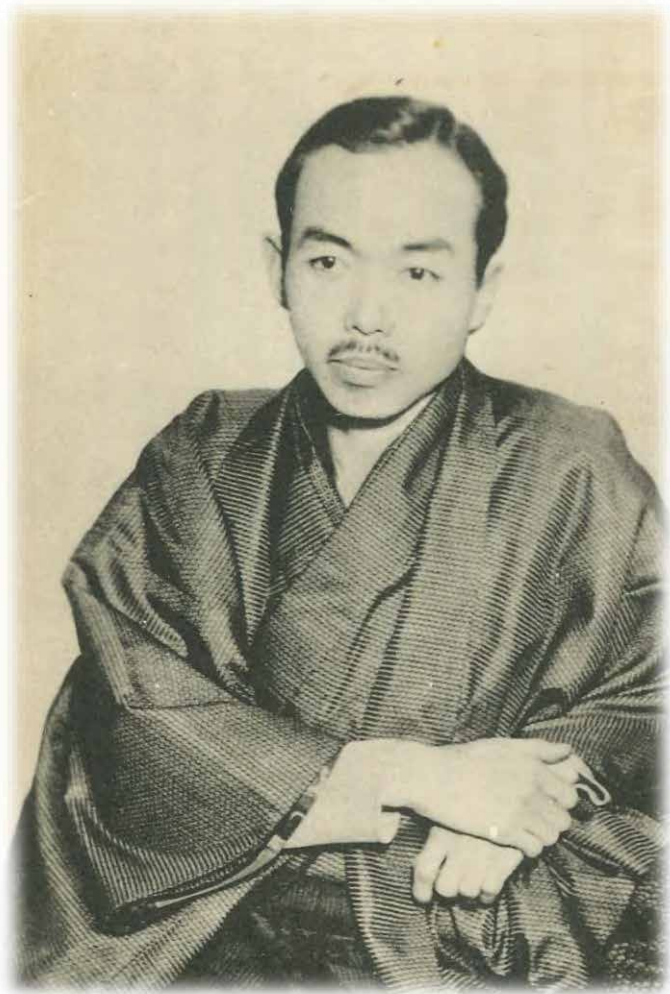


『鬼の言葉』

江戸川乱歩著 春秋社 昭和11年

表紙見返し（効き紙）に乱歩の本名「平井太郎」と書かれた寄贈者票が貼り付けてある。





『闘病問答』口絵より

小酒井 不木（こさかい ふぼく）

1890 年 10 月 8 日～1929 年 4 月 1 日
海部郡蟹江町出身 本名は小酒井光次

名古屋市中区御器所町（現昭和区）に暮らす。
医学博士、小説家・随筆家。「鳥井零水」の筆名で海外探偵小説の翻訳もおこなった。
江戸川乱歩の「二銭銅貨」を激賞して世に送り出すとともに、休筆宣言した乱歩を誘って小説合作組合「耽綺社」を結成するなど終生乱歩を助けた。また、乱歩の熱心なすすめで自らも創作をはじめ、豊富な医学知識に基づいた作品を手掛けた。「人工心臓」や「恋愛曲線」は日本におけるSFの先駆的作品であり、自らの闘病生活を綴った随筆『闘病術』は大ベストセラーとなった。
俳人としての顔も持ち、助手を務めた岡戸武平らと「拈華句会」で共に活動した。

略年譜

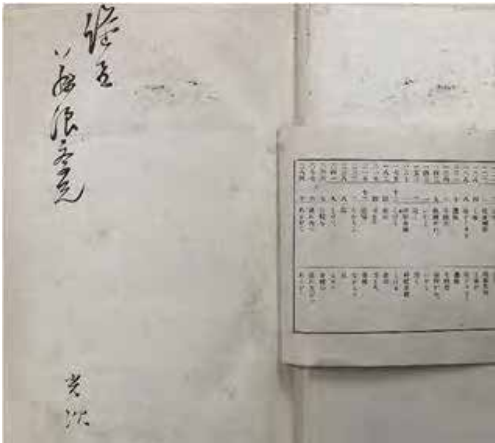
明治 23（1890）	10 月 8 日、蟹江村村長・小酒井半兵衛の長男として誕生
明治 35（1902）	愛知県立第一中学校に入学（現在の旭丘高校）
大正 3（1914）	東京帝国大学医科大学卒業、直後に大学院に入り生理学・血清学を専攻
大正 4（1915）	処女出版物『生命神秘論』を洛陽堂から出版
大正 6（1917）	研究のために留学、探偵小説に魅了されエドガー・アラン・ポーに傾倒する
大正 9（1920）	病によって帰国、その後東北大学教授となるが現地に赴くことなく療養生活に入る
大正 10（1921）	医学博士の学位を取得
大正 12（1923）	江戸川乱歩の「二銭銅貨」の批評を森下雨村（『新青年』編集長）に依頼された不木は、これを激賞して乱歩を世に送り出す 10 月 29 日、名古屋市中区御器所町に新築を建て家族で転居する
大正 14（1925）	1 月、自宅に江戸川乱歩がはじめて訪ねてくる このとき乱歩から創作を書くようしきりにすすめられる
大正 15（1926）	「恋愛曲線」、「人工心臓」を発表、『闘病術』がベストセラーになる
昭和 2（1927）	江戸川乱歩ら新進作家と合作組合「耽綺社」を結成
昭和 4（1929）	4 月 1 日、急性肺炎のため死去 死後、江戸川乱歩や岡戸武平の尽力により『小酒井不木全集』が刊行される

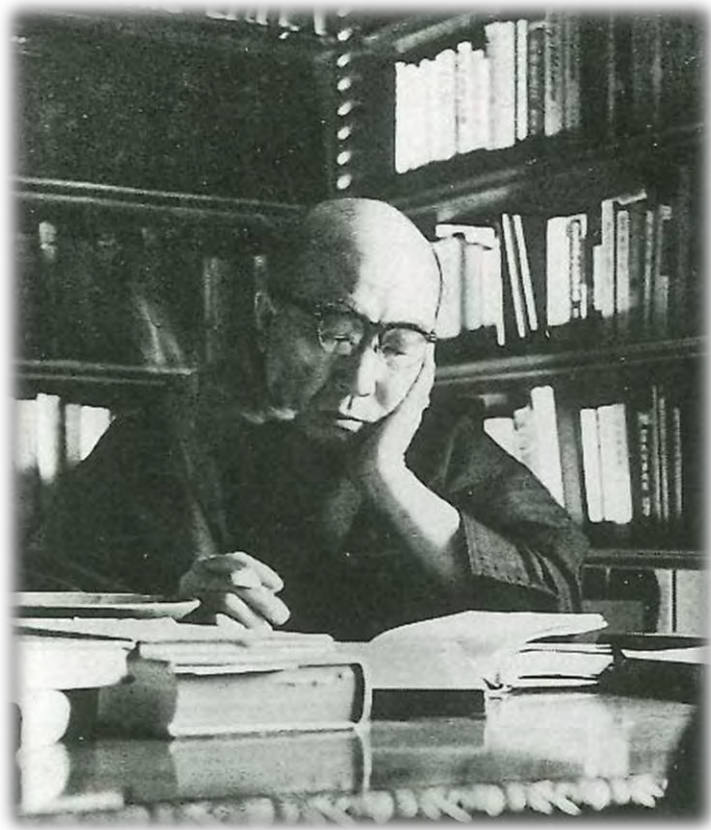
参考：『小酒井不木随筆評論選集 第 8 巻』本の友社，2004 年
『小酒井不木』（叢書『新青年』）博文館新社，1994 年
『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』浜田雄介編，乱歩蔵びらき委員会発行，2004 年



『闘病術』は刊行から約 8 か月で 130 版を超えるベストセラーとなった。

『生命神秘論』の「光次」の署名





『江戸川乱歩アルバム』河出書房新社より

江戸川 乱歩（えどがわ らんぽ）

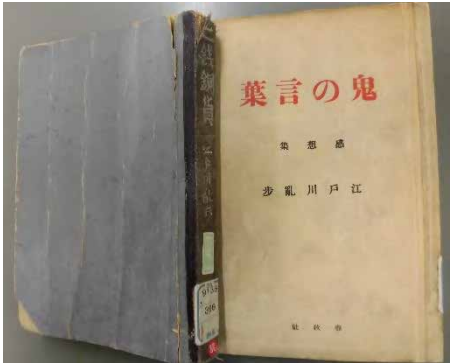
1894 年 10 月 21 日～1965 年 7 月 28 日
三重県名張市生 本名は平井太郎

幼少期から青年期にかけて名古屋で暮らす。
早稲田大学に入学後、ポーやドイルなどの探偵小説を耽読。大学卒業後、職を転々とするも、『二銭銅貨』で小酒井不木に見いだされる。以後、探偵小説作家として活躍。
探偵小説の本質の究明に努めたほか、海外探偵小説界の事情を紹介した。還暦を機に江戸川乱歩賞を制定し、雑誌「宝石」の編集経営に参画。紫綬褒章を授けられた。
社団法人日本推理作家協会の初代理事長を務めた。

略年譜

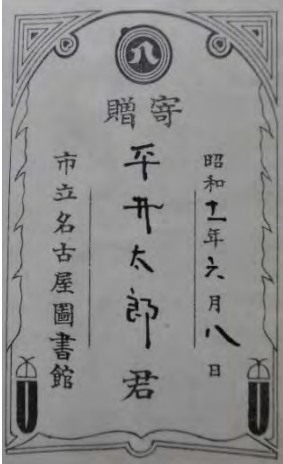
明治 27（1894）	10 月 21 日、三重県名張町に生まれる
明治 30（1897）	家族とともに名古屋市園井町に転居（中学卒業までに名古屋市内で 4 回転居）
明治 34（1901）	名古屋白川尋常小学校入学（現在の栄小学校） 「大阪毎日新聞」掲載の菊池幽芳『秘中の秘』に夢中になり、探偵ものに興味をもつ
明治 40（1907）	愛知県立第五中学校入学（のちに熱田中学と改称、現在の瑞陵高校）
明治 45（1912）	父親が事業に失敗し第八高等学校進学を諦める 家族で朝鮮へ移住後、学問への夢断ち切れず、単身帰国
大正 2（1913）	早稲田大学政治経済学科進学
大正 4（1915）	初の探偵小説執筆、『火縄銃』を雑誌「冒険世界」に送るも不採用
大正 5（1916）	早稲田大学卒業後、貿易商に就職、1 年で辞職し、以来職を転々とする
大正 12（1923）	小酒井不木に見いだされ『二銭銅貨』が雑誌「新青年」誌上に載る
大正 13（1924）	大阪市に転居、作家専業を決意
大正 14（1925）	『D 坂の殺人事件』で明智小五郎が初登場
大正 15（1926）	一家で東京牛込区に転居、新聞に『一寸法師』を連載
昭和 2（1927）	休筆を宣言し各地を放浪、小酒井不木の気遣いで合作組合耽綺社に参加 『押絵と旅する男』の原稿を大須ホテルの便所に捨てる
昭和 11（1936）	『怪人二十面相』を「少年倶楽部」に連載
昭和 36（1961）	紫綬褒章を受章
昭和 38（1963）	社団法人日本推理作家協会認可、初代理事長に就任
昭和 40（1965）	7 月 28 日、脳出血により死去

参考：『乱歩と名古屋』小松史生子／著 風媒社 2007 年
『現代作家辞典 新版』大久保典夫 東京堂出版 1982 年
『私の履歴書 第 3 集』日本経済新聞社／編 日本経済新聞社 1957 年



鶴舞中央図書館所蔵
の『二銭銅貨』（左、昭和 21 年再発行）と『鬼の言葉』（右）

『鬼の言葉』の表紙
見返しに「平井太郎」と書かれた寄贈者票がある



名古屋ゆかりの文学者 小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋文学地図

江戸川乱歩・旧宅跡記念碑



北練兵場

『ふたりの犯人』
ここで考えると事件の
糸口が見つかることが多いらしい

不木が通った愛知県立第一中学校



名古屋停車場

『大雷雨夜の殺人』
死んだ男のスーツケースを
何者かが受け取ってしまう

中村遊郭

『疑問の黒枠』
名古屋でも指折りの富豪・村井
の娘が身を隠していると推理

乱歩の定宿・大須ホテル



大須公園

『大雷雨夜の殺人』
オペラ・コミック団の男が犯人
とみて、探偵が会いに行く

『通夜の人々』
私立探偵・野々口雄三の
自宅兼事務所がある

『酩酊紳士』
鶴舞公園前の駐在所に
亀田巡査が勤めている

鶴舞町・鶴舞公園

御器所町北丸屋の小酒井邸



市立名古屋図書館

『幽鬼の塔』
事件の背景を調べに名古屋へ
市立図書館で新聞を調べる

耽綺社の会合場所・寸楽園



左より長谷川伸、国枝史郎、江戸川乱歩、土師清二、小酒井不木、岩田準一、平山重江

不木が乱歩に送った葉書（大正十四年）

御手紙及び賀状頂きました。早速御返事しやうと思ひ乍ら「D坂」の後読の感想も森下さんへは書いて置き乍らあなたに申さないことを思ひ出しハツと思ひました。感服致せしことは勿論です。
近くに東上のは是非御立寄り下さい。御待ちして居ます。私の家はわがかりにくく一から一寸左に申します。「電車鶴舞公園前下車、公園を貫き、動物園わき、いもん橋を渡り、南へ五六軒歩み東へ曲がり、だら／＼坂五六丁上り北側です」。委細は拝見した上に譲ります。
一月七日

乱歩が通った愛知県立第五中学校



名古屋が舞台の不木・乱歩の小説

- ☆☆☆ 『疑問の黒枠』
- ☆☆☆ 『好色破邪顕正』
- ☆☆☆ 『大雷雨夜の殺人』
- ☆☆ 『通夜の人々』
- ☆☆☆ 『ふたりの犯人』
- ☆☆☆ 『酩酊紳士』
- ☆☆☆ 『石榴』
- ☆☆☆ 『幽鬼の塔』
- ☆ 『獵奇の果』

(☆は名古屋が登場する程度、名古屋度)

乱歩が語る不木の思い出話（昭和四年）

脇掛椅子の凭り心地

江戸川乱歩

『鶴舞公園の慰問橋を渡って二つ目の角を左へ』とタキシの運転手に命じたことが、この四年間に、幾度度であつたであらう。『ア、そのコンクリートの土手のある家だ。』と云つて、私は車を止め止めた。そこに小酒井さんの家がある。門を這入ると正面にコンクリート造りの小さな洋館の窓が見え、窓の鉄格子のまはり、蔭が這つてゐる。丁度その窓の内側に小酒井さんの大型の書物机があつて、時とすると、案内を乞はぬ先に、その窓のガラス越しに、主人の笑顔が私を迎へることもあつた。

私が最も小酒井さんに接近したのは、一昨年の秋から暮にかけてであつた。それは耽綺社の集りの為に名古屋へ行くことが度々であつたからではあるが、耽綺社の会合の外に、小酒井さんと二人で話し合ふ機会が非常に多かつた。

私は種が沢山あるから、それを君の筆で書いて下さるといふ。これからは、フィッシュ兄弟といった調子で、当分二人の名で合作をしようではないか。など、私が種に困つてゐるのを知つて、親切に勧めて下さつたのもその当時である。

私は、小酒井さんの二階の八畳の客間に寝転んで、薄暗い卓上電燈の下で、色々なことを話し合つたものである。私も随分勝手なことを喋り、先輩を批評する様な口さへ利いたが、小酒井さんも、すっかりよき行きの態度を捨て、親しみばかりの人になられた。一緒にお宅の風呂へ這入り、床を並べて寝物語りをしたこともある。

中略

小酒井さんの思ひ話を書くつもりで、その実なんにも書いてゐない様な気がするけれど、故人のことはいくら書いても書き尽せぬ気持だし、約束の枚数にも達したので、外のことは他の機会に譲つて、一先づ筆を擱く。

『新青年』昭和四年六月号

新舞子に不木の別荘

向かい、国枝史郎の自宅



小酒井不木・江戸川乱歩を中心とする 名古屋ゆかりの文学者相関図

小説合作組合

たんき
耽綺社

七本松の寸樂園に毎月1度集まった

くにえだしろう
国枝史郎

1887-1943
長野生まれの小説家。
新舞子に転居。

国枝の自宅前に
不木の別荘

はじせいじ
土師清二

1893-1977
岡山生まれの小説家。

ひらやまろうこう
平山蘆江

1882-1953
神戸生まれ。長谷川伸
とともに『大衆文芸』
を創刊。都々逸、小唄
の作詞も。

はせがわしん
長谷川伸

1884-1963
横浜生まれの小説家。

えどがわらんぼ
江戸川乱歩

1894-1965



幼少年・青年期を名古屋で過
ごす。日本初の純国産探偵小
説「二銭銅貨」でデビューし、
不木を終生「先生」と呼んだ。

スランプの作家と追
いかける編集者、大須
ホテルで枕を並べる

よこみぞせいし
横溝正史

1902-1981
金田一耕助を生み出し
た探偵小説家。乱歩の
招きに応じて上京。『新
青年』編集長時代、放浪
する乱歩を追いかけて
名古屋へ。

博文館の雑誌
『新青年』

もりしたうそん
森下雨村

1890-1965
『新青年』の編集長。
外国の探偵小説の紹
介と、日本の探偵小説
家の育成に尽力。自ら
も創作を行う。

③「二銭銅貨」を絶賛

乱歩のデビューを助ける

④不木邸で初対面

不木に創作をすすめる

②オリジナルの純国産探偵小説か、確認を依頼
先生と助手

大阪時事新報社
時代の同僚

こさかいふぼく
小酒井不木

1890-1929



医学博士。江戸川乱歩を見出
した文学者で、日本のSF小
説の先駆者とも。鶴舞公園近
くに居宅跡がある。

ねんげ
拈華句会

不木が武平に遊び半分で「俳句
会をやろう」といいだしてはじ
まった句会

しおやまちょうぞう
潮山長三

1892-1931
矢場町生まれ。名古屋
新聞の記者で、『闇の
杜心中』を連載。

すぎうらいせき
杉浦冷石

1896-1977
俳人。戦後「白桃」
を創刊。

ふじなみすいしよ
藤浪水処

1886-1938
久屋町生まれの翻訳
家。著作に『ハイネ評
伝』。洋装紳士で広小
路伯爵の異名も。

同窓の
先輩と後輩
不木の紹介で
『ハイネ評伝』
を出版

とのしまそうじん
殿島蒼人

1897-1970
演劇評論家、昭和区丸
屋町に住む。名古屋新
聞勤務時代に、全国に
さきがけて紙上に映画
欄、釣魚欄を設ける。

桃山葱雨

小沢静生

小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋ゆかり年表

和暦（西暦）	小酒井不木（本名：小酒井光次）		江戸川乱歩（本名：平井太郎）	
明治 23（1890）	0	10 月 8 日 蟹江村（現蟹江町）で誕生		
明治 27（1894）	4		10 月 21 日 三重県名張町（現名張市）で誕生	0
明治 30（1897）	7		名古屋市園井町（現中区）に転居（中学卒業までに市内で 4 回転居、園井町→葛町→南伊勢町→栄町→南伊勢町）	3
明治 34（1901）	11		名古屋白川尋常小学校（現栄小学校）に入学	7
明治 35（1902）	12	愛知県立第一中学校（現旭丘高校）に入学		8
明治 40（1907）	17	愛知県立第一中学校を卒業、第三高等学校（京都）に入学	愛知県立第五中学校（現瑞陵高校）に入学	13
明治 43（1910）	20	東京帝国大学医科大学（現在の東大医学部）に入学		16
大正 4（1915）	25	洛陽堂から『生命神秘論』を処女出版 不木①		21
大正 12（1923）	33	1 月 雑誌『新青年』編集長の森下雨村から乱歩の「二銭銅貨」が外国作品の模倣でないか確認の依頼を受けた不木は、「二銭銅貨」が日本ではじめて生まれた探偵小説だと保証し、長文の賞賛推薦の辞を送る 4 月 『新青年』に「『二銭銅貨』を読む」を寄稿 7 月 不木と乱歩の手紙のやりとりがはじまる 10 月 名古屋市中区御器所町（現昭和区）に転居 不木②③	4 月 『新青年』掲載の「二銭銅貨」でデビュー 	29
大正 13（1924）	34	11 月 手紙で乱歩に作家専心をすすめる	大阪毎日新聞社を退社し、文筆のみを決意	30
大正 14（1925）	35	1 月 乱歩が小酒井不木邸をはじめてたずねる このとき乱歩からしきりに創作をすすめられ、不木は小説を書くようになる	乱歩③	31
大正 15（1926）	36	 1 月 「恋愛曲線」「人工心臓」を発表		32
昭和 2（1927）	37	不木④ 11 月 不木が唱道した小説合作組合「耽綺社」第 1 回会合（名古屋寸楽園）出席者は江戸川乱歩、小酒井不木、国枝史郎、長谷川伸、山下利三郎、 <u>横溝正史</u>	4 月 休筆を宣言し各地を放浪 乱歩を追いかける『新青年』編集長 乱歩④ この年の末 大須ホテルの便所に原稿を捨てる 乱歩⑤⑥	33
昭和 4（1929）		4 月 1 日 急性肺炎にて死去（38 歳） 不木⑤	4 月 2 日 不木の葬儀に列席のため名古屋へ赴く 5 月 岡戸武平と『小酒井不木全集』の出版に尽力	35
昭和 40（1965）		後に蔵書や資料の一部が蓬左文庫へ 不木⑥	7 月 28 日 脳出血で死去（70 歳）	

小酒井不木エピソード集

1. 不木と水処、二人の友情の証
2. 大正十二年、自ら設計した家に移住
3. 父親としての小酒井不木
4. 『不木・乱歩・私』 岡戸武平が語る秘話
5. 国枝史郎が語る小酒井不木
6. 小酒井不木文庫と資料（蓬左文庫について）

田 不木と水処、二人の友情の証

昭和三年の広小路、大須界隈、中村遊郭を観察した不木（本名 光次）の随筆「名古屋スケッチ」に、広小路伯爵の異名をもつ洋装紳士が登場する。この広小路伯爵こそ、愛知県立第一中学校（現旭丘高校）の同窓の先輩、藤浪水処（本名 由之）である。不木と水処、二人の友情の証が鶴舞中央図書館の旧蔵書の中に残っていた。

名古屋公衆図書館（現西図書館）の蔵書印がある洛陽堂発行『ハイン評伝』のはしぎには、「この小冊子の出版に就いて、友小酒井光次氏の多大の行為と盡力とを同氏に深く感謝する。大正五年十月 水處生」と書かれている。また、不木の処女出版である『生命神秘論』には市立名古屋図書館の蔵書印があるが、こちらは大正四年六月の発行で、出版社は同じく洛陽堂。

実は『ハイン評伝』の出版は、不木の紹介によるもので、末尾には不木が書いた解説もある。一方、『生命神秘論』

には「光次」の署名があり、不木が贈呈したものだった。どちらも藤浪修一

氏からの寄贈本である。



『生命神秘論』の署名

㊦㊦ 大正十二年、自ら設計した家に移住

その年も暮れて大正十二年となり、八月には有馬温泉へ行くつもりであつたが、子どもが病氣して愛知醫大病院へ入つたので、私は名古屋へ一二度見舞ひに出た。それ程私の健康は恢復したのである。有馬行きは自然御流れになり九月に入つた。一日には關東大地震があり、二三日後大東京の慘状が報ぜられてびつくりした。

― 中略 ―

夏頃から、名古屋の東郊御器所に自分の設計した家が建築されつゝあつて、その頃漸く竣功したので、私は十月二十九日に新宅に移住し、それより今日まで、約二ヶ月半餘り、一度も原病のために床に就くことなしに暮して來たのである。



小酒井不木邸 『小酒井不木全集』より

☐ 父親としての小酒井不木

長男・小酒井望にとって、父・不木は厳格な父親だったという。ゲンコツを頭に食らうこともあったらしい。

しかし、ときには

「洋食をたべに連れてってやる」と望を

鶴舞公園近くの**商工**

会議所地下の精養軒

へ連れて行くことも

あったという。自身

が病気がちだったこ

ともあり、一家で旅

行することも数える

ほどしかなかったと

いうが、近場でもと

我が子を外食に連れ

出す、父親としての

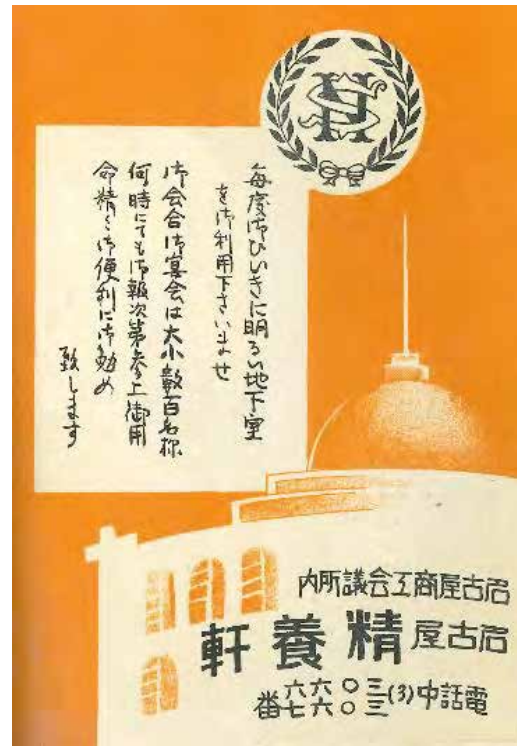
不木のやさしさが垣

間見えるエピソード

である。



『名古屋市街全図』 伴野辰次郎製図
名古屋図書出版六楽会 大正13年



『大名古屋便覧』 江崎浮山編
大名古屋便覧発行所 昭和11年

㊦ 『不木・乱歩・私』 岡戸武平が語る秘話

知多郡横須賀町（現東海市）生まれの岡戸武平は名古屋ゆかりの文学者の一人である。武平の名古屋との縁は、大阪時事新報社時代に肺結核を患ったことにはじまる。

武平は名古屋市立八事診療所に入所し、ついで日赤診療所に移り、半全快の状態で退所する。そこに舞い込んできたのが不木の助手の仕事だった。

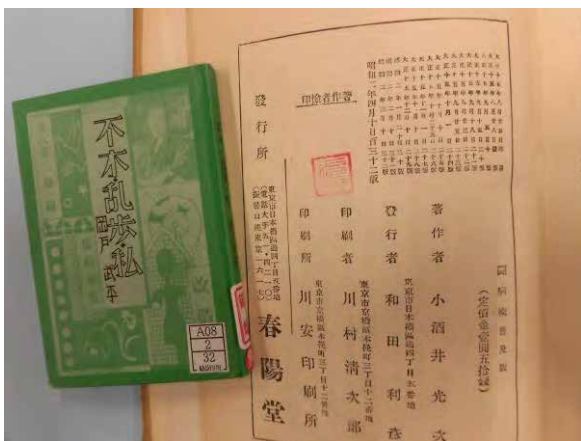
小酒井邸を訪れると話はずぐに決まった。さしあたっての仕事

は『闘病術』を書くこと。何を隠そう不木のベストセラーである。

共著とする約束が出版社の申入れで不木の単著となり、その代わりに序文の最後に武平への謝辞の言葉が入れられた。それを武平は光栄なことだと言う。

そして、乱歩との再会も不木がきっかけだった。書斎の回転書架の上に置かれた耽綺社の集まりの写真の中に大阪時事新報社の同僚だった平井太郎が写っていたのだ。

平井太郎、探偵小説家・江戸川乱歩の本名である。



『闘病術』（昭和2年4月10日発行の132版）
と名古屋豆本『不木・乱歩・私』



国枝史郎が語る小酒井不木



『日本探偵小説集 第18篇』
国立国会図書館デジタル
コレクションより

故小酒井不木氏は名古屋市
に於ける寵児であつた。あらゆる
の会合へ引っぱり出され、さま
ざまの講演会へ引っぱり出さ
れ、驚くばかりに多方面の人に、

訪問をされ、氏に於てもいろいろの人を訪ねた。

― 中略 ―

かと思うと氏は素人の芝居などの、舞台監督をやられたり、キャフェーへ出かけて談笑したり、諸方面の歓迎会や送別会などへ、常に出席をして倦まなかった。東京その他の方面から、名古屋市へ来た文人や俳優や、学者や雑誌編輯者などは、一度は大概氏の家を訪うた。そうして一度訪うた者は、その後必ず訪問した。

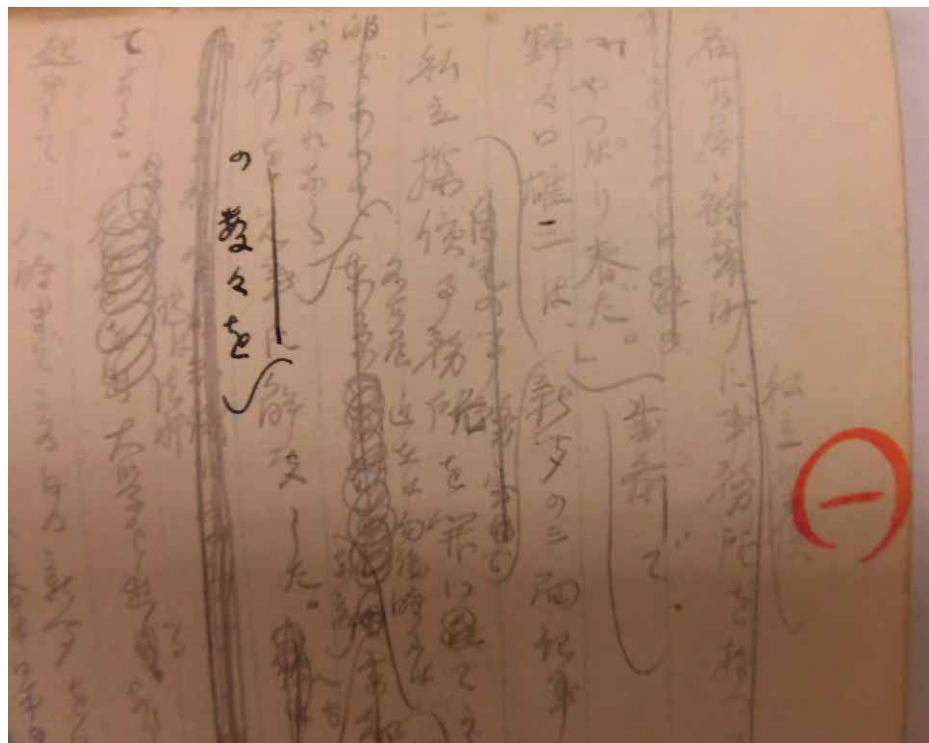
― 中略 ―

かくも氏が名古屋に於て寵児となつたのは、趣味が多方面であり、話が聞き上手であり、性質がさつそくであつて渋滞せず、感情的で無くむら気でなく、理性的であつて親切であり、絶対に信頼される人——そういう人であつたからであらう。



小酒井不木文庫と資料

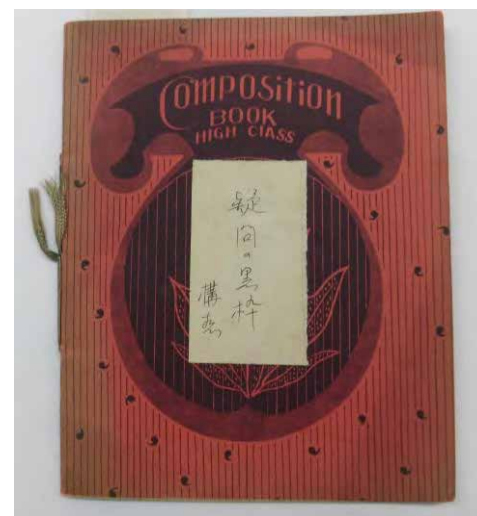
名古屋市蓬左文庫の和装本
書庫には、小酒井不木の遺族
から寄贈された図書（小酒井
不木文庫）と資料が収められ
ている。資料は、不木と息子の
望が収集した浮世絵・葉書な
どが中心だが、不木の日記や草稿も含まれている。



蟹江で実際に起こった事件をもとにした創作『通夜の人々』の草稿、
名古屋鶴舞町に私立探偵事務所を持つ名探偵・野々口雄三が登場する
（名古屋市蓬左文庫蔵）

蓬左文庫について

東区徳川町、徳川園・
徳川美術館隣接に名古屋
市蓬左文庫がある。尾
張徳川家の旧蔵書を中
心に和漢の優れた古典
籍を所蔵する公開文庫。
さらに、尾張徳川家に伝
えられた絵図、古地図な
ど所蔵内容の豊富さが
特徴となっている。



名古屋が舞台の小説『疑問の黒枠』
（名古屋市蓬左文庫蔵）

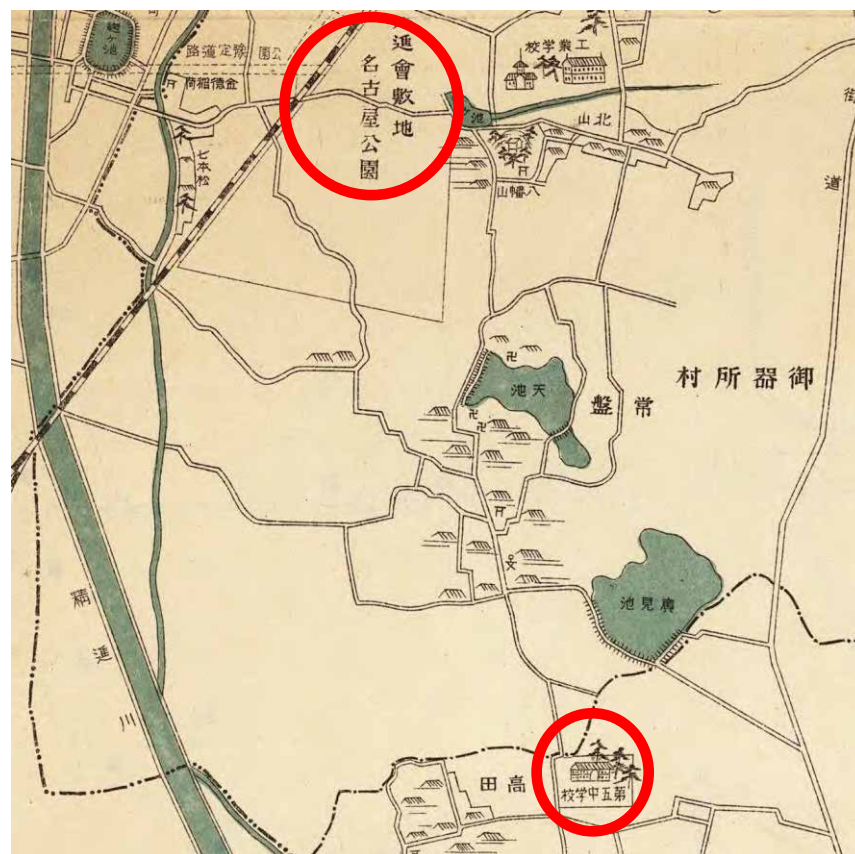
江戸川乱歩エピソード集

1. 大根畑の中の学校（現瑞陵高校）に通う
2. 処女作も処女出版も不木のお膳立て
3. 不木邸を訪ね、不木に創作をすすめる
4. 七本松の寸樂園で小説を合作
5. 大須ホテルの陰気な部屋を愛用
6. 大須ホテル、横溝正史の隣で



大根畑の中の学校（現瑞陵高校）に通う

明治 42 年 3 月発行の『名古屋案内地図』（部分）



乱歩は明治 40 年に開校した愛知県立第五中学校の第 1 回卒業生である。第五中は大正 11 年に愛知県熱田中学校と改称、昭和 23 年に愛知県立瑞陵高等学校と改称しているので、卒業時点の校名は第五中。

なお、この地図は鶴舞公園の公園名が決定する前の地図のため、公園予定地には候補の一つであった「名古屋公園」と表示されている。

おやじのチョッキを着て、サーベルをさげて、友達一人なく、独りぼっちで威張っているうちに、学齢が来た。

名古屋市白川尋常小学校である。それから、大根畑の熱田中学第一回卒業生である。かけ足がゾツとする程いや。器械体操のかいもくできない弱虫。その上内気者のにやけ少年。強い奴にいじめられるために生まれて来たような男。で、学校は半分くらい病氣欠席。



処女作も処女出版も不木のお膳立てで

私の処女出版は大正十四年七月、春陽堂から出した短編集「心理試験」であつた。処女作「二銭銅貨」を「新青年」に発表したのが大正十二年四月号だから、二年あまりたって本が出たわけだが、その二年間は他に勤めを持っていた、全くの余技としてやっていたので、作量もごく少なく、これまでの短篇全部を集めて、やっと一冊の本になった。

私の処女作は故小酒井不木博士の賛辞つきで発表されたが、この処女出版も小酒井さんが春陽堂に話して、ちゃんとお膳立てをして、名文の長い序文を書いて下さった。ドイツ製のエビ茶色クロスに金文字の表紙、内容はコットン紙の感じのいい本で、定価は二円。当時としてはよく売れたので、春陽堂はその後ひきつづき私の本を出してくれた。私は作家生活三十余年のあいだにいろいろな形で二百五十冊ほど本を出したが、この処女出版はその中でも最も気に入っている装釘の一つである。

㊦㊦ 不木邸を訪ね、不木に創作をすすめる

私は、江戸川氏にむかって、探偵小説家として立ってはどうかということすすめた。すると、森下氏あたりからも、その話があったと見え、同氏は『心理試験』の原稿を私に送り、これで探偵小説として立ち得るかどうかを判断してくれというような意味の手紙を寄せた。

― 中略 ―

そこで、更に大いにすすめたのであるが間もなく、一度上京して、色々な人に逢って決したい。その序でに立ち寄るとい手紙が来た。私は大に待った。十四年の一月、とうとうやって来た。初対面の挨拶に頭の毛がうすいのを気にする言葉があった。

― 中略 ―

同氏はこのとき、頻りに私に、創作に筆をそめるようすすめた。私も、創作をして見ようかという心が、少しばかり動いて居たときであるから、とうとう小説を書くようになったのである。『女性』四月号に出た『呪われの家』がいわば私の処女作であった。

「江戸川氏と私」より



七本松の寸樂園で小説を合作

昭和二年の末から四年の秋ごろまで、小酒井不木、国枝史郎、平山廬江（以上故人）、長谷川伸、土師清二、江戸川乱歩の六人が、「**耽綺社**」という**小説合作の組合**を作**って、毎月一度名古屋市に集まっていた。**

小酒井、国枝の両氏が名古屋の住人で、二人とも病身だったので、ほかのものは、わざわざ名古屋まで出かけて行ったものである。多くは一、二泊、時には数日滞在することもあった。

「**寸樂園**」という**同市の料亭に集まり、筆記者をそばにおいて、六人で小説の筋をこしらえる。**それを筆記者が文章にしたのを、メンバーのだれかが目を通し筆を加えて雑誌社に渡すという、まことに虫のよい売文業であった。

「耽綺社」（『江戸川乱歩推理文庫57』 講談社 所収）より

寸樂園の広告



『大名古屋便覧』

江崎浮山編 大名古屋便覧発行所

昭和11年



大須ホテルの陰気な部屋を愛用

大須ホテル

という旅館は、

昔その土地に

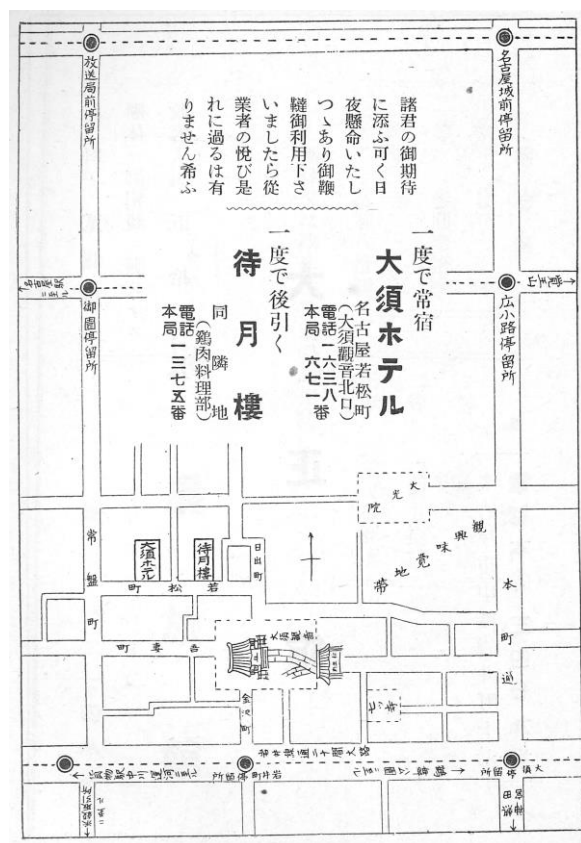
遊郭があった

ころ、一番大き

な遊女屋だった

建物で、その

まま旅館にし



『名古屋観光案内』

(名古屋観光協会 昭和8年) の広告

たもので、この写真の部屋はその大きな建物の最も奥まったところがあり、八畳に三畳か四畳の次の間がついていた。長谷川伸さんの説によると、これは遊女屋時代の「トヤ部屋」というもので、永わづらいの遊女をとじこめておく部屋だったらしいのだが、なにか陰惨な気が漂っていて、おかし心中でもあったのではないかという感じが、かえって私を引きつけたのであろう。ほかの客部屋から遠くはなれてシーンと静まりかえったこの陰気な部屋を、私は自分の部屋ときめて、いつもそこへ泊ることにしていた。

田 大須ホテル、横溝正史の隣で

昭和2年、乱歩は放浪の旅の途上だった。横溝正史は知人に旅費を貸してもらい京都まで乱歩を追いかけた。京都の宿屋に押しかけ、なだめつ、すかしつ、おどしつとあらゆる手段をつくした揚句、「旅の帰りに小酒井不木氏のところで旅行中に書いておいた原稿を渡す」と乱歩は約束した。

ところが、約束の日名古屋の小酒井氏のところで落ち合うと「とうとう書けなかった」という返事。その晩、乱歩と正史は名古屋の大須ホテルに宿泊。枕を



大正 15 年、作家活動に本腰を入れるべく上京。夏、近所の神楽坂の写真館にて写す。

並べて寝ていた乱歩がむっくり起きて鞆をゴソゴソした後、便所に行った。再び戻ってきて「実は僕、書いていたんだよ。しかし、あまり自信がないから小酒井さんの前でだしかねたのだ」と言う。正史は驚喜して飛び起きた。しかし、乱歩は「ところが、いま便所の中へ破って捨ててきた」と続けたのだった。その時、乱歩が便所へ捨てたのが傑作「押絵と旅する男」であったという。正史は、「このいきさつを思い出すと、穴へ入りたい」と言っている。

S F とは

サイエンス・フィクション (science fiction)

の略で、かつては「科学小説」または「空想科学小説」の語が当てられていた。広く公認された定義は確立されておらず、S F 作家の数ほどS F の定義があり、しかもどの定義にも何かが欠けているとも言われている。

自己のルーツとアイデンティティを模索する日本S F 界は、小酒井不木の作品にS F 性を見いだした。柴野拓美は「日本S F 史雑論」の中で、“小酒井不木が探偵小説界に登場したのは大正十年頃。**ここで初めて日本人による純S F と言えるものが生まれた。**心臓の鼓動のグラフで人間の感情を測定するという「恋愛曲線」や、機械の心臓をとった人間が、感情を失うという「人工心臓」等、共に大正十五年に発表されたもので、当時としては極めて斬新な発想だった”と述べている。

参考：『日本大百科全書 3』 小学館 1985 年

『柴野拓美S F 評論集』 柴野拓美著 東京創元社 2014 年

小酒井不木を青空文庫で読む

これらの作品には、今日からみれば、不適切と受け取られる可能性のある表現があります。

恋愛曲線

日本人による初めての純SF作品



人工心臓



名古屋スケッチ

広小路伯爵が登場する随筆



好色破邪顕正

全編を通じて名古屋が舞台



【作品データ】の「青空 in Browsers で縦書き表示。PC、スマホ、タブレット対応」をタップする（画面を指で触れる）と、ブラウザで縦書き表示されます。

主な参考資料・出典一覧

◎小酒井不木 年譜

『小酒井不木随筆評論選集 第8巻』 本の友社 2004 年

『小酒井不木』（叢書『新青年』） 博文館新社 1994 年

『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』 浜田雄介編 乱歩蔵びらき委員会発行 2004 年

◎江戸川乱歩 年譜

『乱歩と名古屋』 小松史生子著 風媒社 2007 年

『現代作家辞典 新版』 大久保典夫編 東京堂出版 1982 年

『私の履歴書 第3集』 日本経済新聞社編 日本経済新聞社 1957 年

◎小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋文学地図

『名古屋市居住者全図 昭和4年調昭和8年調』 1938 年

『愛知県立第一中学校』（なごやコレクション（名古屋市史資料写真集））

『名古屋観光案内』 名古屋観光協會編纂 名古屋観光協會 1933 年

大須ホテルの広告

『名古屋名妓』 芝居屋 出版年不明

寸樂園の広告

『江戸川乱歩アルバム』 新保博久編 河出書房新社 1994 年

『名古屋案内地図 訂正3版』 外松鋳三郎著 菊花堂 1967 年（市 20-132 なごやコレクション）
第五中学校付近

『尾張新舞子海水浴場』（愛 16-05 なごやコレクション（名古屋の絵葉書集））

『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』 浜田雄介編 乱歩蔵びらき委員会発行 2004 年
大正 14 年 009 不木書簡 1 月 7 日 ハガキ

「回想 肱掛椅子の凭り心地」 『新青年』 昭和 4 年 6 月号

「名古屋物語」 名古屋市図書館ホームページ（名古屋なんでも調査団）

◎小酒井不木・江戸川乱歩を中心とする名古屋ゆかりの文学者相関図

『名古屋豆本 第32集 不木・乱歩・私』 岡戸武平著 亀山巖 1974 年

『ある句会 ねんげ俳句会半世紀』 ねんげ句会 1980 年

『蒼人遺稿』 殿島蒼人著 丸屋工房 1975 年

◎小酒井不木・江戸川乱歩 名古屋ゆかり年表とエピソード集

『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』 浜田雄介編 乱歩蔵びらき委員会発行 2004 年

「江戸川乱歩・小酒井不木関連年表」

「江戸川氏と私」

『藤浪水處の翻訳文学 廣小路伯爵小伝』 木下信三 2014 年
『闘病術』 小酒井不木著 春陽堂 1926 年
『名古屋豆本 第 32 集 不木・乱歩・私』 岡戸武平著 亀山巖 1974 年
『大名古屋便覧』 江崎浮山編 大名古屋便覧発行所 1922 年
 精養軒の広告
 寸樂園の広告
『別冊・幻影城 No.16 特集：小酒井不木』 1978 年 3 月号
 「父不木の思い出」 小酒井望著
 「小酒井不木氏の思い出」 国枝史郎著
『名古屋市街全図』 伴野辰次郎製図 名古屋図書出版六楽会 1924 年
『江戸川乱歩推理文庫 57』 講談社 1988 年
 「一頁自伝」
 「処女出版」
 「耽綺社」

◎ S F とは

『日本大百科全書 3』 小学館 1985 年
『柴野拓美 S F 評論集』 柴野拓美著 東京創元社 2014 年
 日本 S F 史雑論

小酒井不木と江戸川乱歩展示資料集

2021 年 1 月 発行

編集 名古屋なんでも調査団

発行 名古屋市鶴舞中央図書館

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞一丁目 1 番 155 号
